

19世紀の世界万国博覧会と貴重書

図書館司書二課課長 瀬川 建一

1. はじめに

2001年9月11日、世界を震撼させる歴史的事件が起こった。ニューヨークの超高層ビル、国際貿易センタービルがテロで壊滅した。その後も険悪な情勢が続いている。この事件をアメリカは「世界の民主主義に対する挑戦」と位置づけているが、いわゆる「第三世界」からすると、それは「欧米の世界支配への反抗」であり、その背景には第三世界の劣悪な貧困と欧米資本による支配という矛盾・対立の構造がある。

欧米による世界支配は18世紀末、イギリスに起こった産業革命が19世紀に欧米で本格化し、資本主義体制と世界市場が確立することにより完成する。ここにおいて、一方での先進国・世界帝国、他方での後進国・植民地という二極構造が形成され、世界は経済的・政治的・文化的に欧米人により支配されるようになった（今日、ファッションにおいても元々欧米人だけが着ていたスーツ・ネクタイ・スタイルが世界のスタンダードとなっている）。

19世紀イギリス、フランスの万国博覧会に限定してみても、それらは単に目新しい機械、器具、工芸品などの展示会というだけではなく、ヨーロッパによる「世界支配の勝利宣言」とでも言うべき歴史的意義をもっている。

19世紀のイギリス、フランスは国の威信をかけ競って産業・機械・技術の発展・振興を目指し、あたかも万博は「国際技術オリンピック」の姿を呈していた。万博は1851年の第1回ロンドン万国博覧会がその嚆矢とされるが、国を挙げての一大イベントにふさわしい水晶宮（クリスタル・パレ

ス）という画期的な会場に、世界各国から新技術、産業機械、工芸品などが出展され、600万人以上もの人々が入場し大成功を収めた。

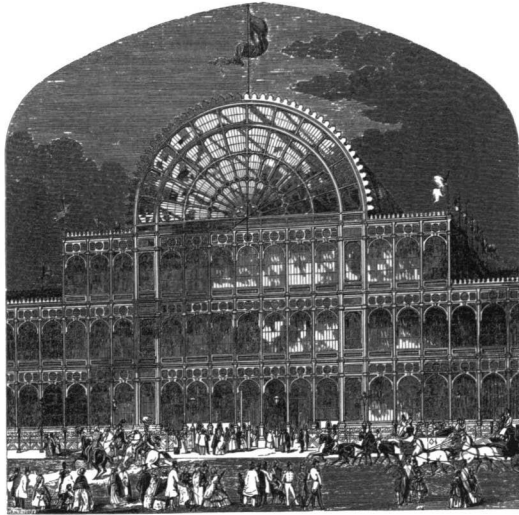
ヴィクトリア女王の婿君・アルバート殿下を総裁とした万博は国威発揚の装置として成功しただけでなく、国民統合への格好の装置でもあった。たとえば、周囲20km以内、村落から終生一歩も外に出なかったような農民が、当時最新の蒸気機関車に乗り全国から大挙見学に押し寄せたのだった。

彼らはおとぎ話でも見たことのない総ガラス張りの水晶宮に仰天し、自国の最新の産業技術に感嘆し、世界への視野を広めると同時に、最先端文明国としての自国の栄光に酔った。そして会場のはずれにある植民地、後進国、未開国の「見世物」に、異国情緒と先進国民としての優越感とを味わったのだった。つまり、万博によってE・サイドのいう「オリエンタリズム」が大衆レベルまで一般化・普遍化されたのである。

2. ロンドン万博の貴重書

当時を紹介する図書館所蔵の貴重書で第1回万博では、The art journal illustrated catalogue : the industry of all nations 1851.<K606.9-A>がある。主に陶磁器、ガラス器、家具などの工芸品を紹介した銅版面の図集だが、ウェッジウッドの壺（ジャスパーウェアといわれるラベンダー色の陶器）が展示されている（ウェッジウッドは1867年のパリ万博でも金メダルを受賞している）。

また、1862年、第2回のロンドン万博ではThe



水晶宮（クリスタル・パレス）

art journal illustrated catalogue : of the international exhibition 1862. <K606.9-A>と Masterpieces of industrial art & sculpture at the international exhibition 1862.<K750.87-W>を所蔵している。特に後者は多色刷り石版画300点を含む3巻の大型豪華本であり、世界中から展示された宝物が紹介されている。

例えば陶磁器では、フランスのリモージュ、セーブル、ドイツのマイセン、デンマークのロイヤル・コペンハーゲン、イギリスのウェッジウッド、ミントンなど、今日でも世界的に有名なブランドが掲載されている。また、幕末の日本公使だったR・オールコックが日本の工芸品の個人コレクションを展示しており、第3巻に掲載されている。

3. パリ万博の貴重書

パリ万博はロンドン万博から遅れること4年、1855年にナポレオン3世の命によりイギリスに対抗しフランスの産業振興を目指して開催された。

第2回が1867年、第3回が1878年に開催された。また、万博と相まって1853年から1870年にかけて、オスマン男爵（セーヌ県知事）による近代都市としてのパリ改造が進行し、パリは今日のような「世界の都」「花の都」としての美観を呈するようになる。

第4回（1889年）のパリ万博の当館所蔵本は L'exposition de Paris 1889.<K606.935-E>と L'exposition universelle de 1889.<K606.935-M>とがある。フランス革命100周年を記念したこの万博の目玉は何と言っても巨大鉄塔・エッフェル塔であり19世紀の一大事業だった。二つの書物は共にエッフェル塔が建設されるプロセスを銅版画で詳細に描いている。また、前者の2巻には大名屋敷風の日本館が紹介されている。

第5回1900年のパリ万博は19世紀最後を飾る万博だった。L'exposition de Paris 1900.<K606.935-E>と Les industries artistiques françaises et étrangères, à l'exposition universelle de 1900.<K750.87-G>とを所蔵するが、後者は万博に出品された美術工芸品（ほとんどがアールヌーボー調）の写真図版集である。また、前者は万博を包括的に紹介しており、2巻には法隆寺金堂を模した日本館と庭園が載っている。ちなみに万博会場内で公演された川上貞奴の演劇は空前の大人気を呼び、高級演劇雑誌Le théâtre <K770.5-T>44号（1900年10月）の表紙を飾っている。

4. 日本の展示と万博の終焉

以上、万国博覧会に関する資料を通覧したが、日本の展示・出品は伝統的工芸品が中心だった。先進的工業が未発達な明治時代という制約の下では、産業の近代化を進めるためにはそれらで外貨を稼ぐ以外、選択の道はなかった。しかしその結果、日本趣味、東洋趣味という異国情緒が「西欧文明の刺身の妻」とはいえ時代の流行となり、ファッションの帝王、ポール・ポワレなどに大きな影響を及ぼしたのだった。

日本が晴れて万博を主催する大国になるには1970年まで待たなければならなかった。しかし、この大阪万博（人類の進歩と調和）以降、文明万能を楽天的に謳う時代は終焉した。対立と矛盾が顕在化する21世紀に私たちは今、直面している。